

内村鑑三 闘いの軌跡(七)

A Critical Biography of UCHIMURA Kanzo (Part 7)

関口 安義

SEKIGUCHI Yasuyoshi

第七章 熊本・京都時代

一 熊本英学校へ

神の与えた同伴者

内村鑑三の生活は、妻しづを得てようやく安定してきた感があつた。しづは前々章(第五章の四)で詳しく述べたが、当時京都地方裁判所の判事であつた岡田透の次女で、未だ十代、容貌に恵まれた女性であつた。しかも、貞淑で、貧しさにもめげず鑑三の生涯をよく支えた。彼女は単純ながらキリスト教信仰をすでに持っていた。これは兄、寛の影響・感化であつたかも知れない。アメリカの友人ベ

ル宛書簡には、「彼女の抱く信仰、すなわち極めて単純なキリスト教を除けば、彼女は全く「異教」の女性です」(二八九三・一・一一付)と書き付けていることも先に記した。やがてしづは、鑑三の感化で確たる信仰を抱くようになる。鑑三はしづを、神が与えてくれた同伴者と固く信じていた。

結婚後二人は協力して、結婚翌月の一八九三(明治二六)年一月八日から大阪基督教会の老松町講義所に日曜学校を開設する。来会者はベル宛書簡では最初は八名、後には「内村夫妻以外に二〇名ぐらい」になつたという。この年一月十日、勤務する大阪泰西学館の第四次卒業式が大阪基督教青年会館であり、鑑三は式辞(告示)を述べている。卒業生は尋常科二名、高等科三名、計五名であつた。それにしても泰西学館は在学生が少なく、経営は容易ではなかつたようだ。当時のベル宛の書簡にも、そのことは出てくる。

当時鑑三は、財政的には極度に苦しい新婚生活を送っていた。しづはそうした鑑三を精神的になにかと支えた。彼女は若く、健康にも恵まれていたので、多少のことにはめげなかった。が、鑑三には自分たちの生活ばかりか、東京にいる老いた両親と弟妹を支える義務があった。すぐ下の弟達三郎は、中等学校(旧制中学)の教師や翻訳で、何とか独立していたが、他の肉親は彼の援助に期待していたのである。その負担は容易ならぬものがあつた。

個人の精神の自由を第一に考える鑑三ではあつたが、一方で彼は幼少時から四書・五経をたたく込まれていただけに、「父母に孝に」の教えからの離脱は考えられなかった。そのためには、長男である自分が稼ぎ、家族を養わねばならないとの義務感から、一時も抜け出すことはできなかった。彼は経済的に富みたいとの思いが尽きなかった。鑑三は京都時代の著作『後世への最大遺物』^②でも説くように、金銭を得ることを単純に否定しない。彼には金銭の必要が、その貧しい状況の中で痛いほど知らされていたのである。

では、彼に出来ることは何か。教師という職業は、彼には打って付けの仕事と思われた。しかし、帰国後すぐに勤めた北越学館は、宣教師の横暴を指摘したことや、学校の運営方針をめぐる紛争で追われる。次に彼には最もふさわしいと思われた最高の学府としての職場、第一高等中学校(後の第一高等学校)も、不敬事件でこれまた追われる。

他の諸学校でも、彼はそれなりの努力をしたものの、非常勤教師の待遇など高が知れており、一家を養うなど到底出来るものではなかった。彼は常勤の仕事を求めて、はるばる大阪まで来たのである。泰西学館の生徒は、鑑三には満足できる「慧い青年」^③の群れで、「つ

まらぬ僕なる私の命のままに、右にでも左にでも、よろこんで従おうとしています」と、これもアメリカのD・Cベル宛書簡に書いているほどであつた。

けれども大阪泰西学館の待遇は、専任とはいえ給与は微々たるもので、結婚して家庭を持ち、しかも東京にいる両親と弟妹を支えるには到底足りるものではなかった。鑑三の生活は、貧窮のどん底にあつた。彼はしづとの生活と老父母と弟妹のためにも、転職を考へざるを得なかった。

大阪泰西学館を退職し、熊本英学校へ

一八九三(明治二六)年の春四月、内村鑑三は愛着のあつた泰西学館を依願退職し、アメリカ時代からの友、蔵原惟郭^{くらしほ}が校長を務める熊本英学校に赴任した。

熊本英学校は一八八八(明治二一)年四月二〇日、熊本市に設立されたミッションスクールである。初代校長は鑑三とも面識のあつた海老名弾正で、蔵原惟郭は二代校長にあつた。この学校は当時学校騒動(奥村禎次郎事件とも呼ばれる)を蒙つていた。その概略を記すと、一八九二(明治二五)年一月十一日に、蔵原惟郭が校長に就任する際、同校の教員奥村禎次郎が演説を行った。その演説の中で国際的な博愛平和主義を述べたところ、これが教育勅語の趣旨に反する発言だとされ、『九州日日新聞』などが奥村を批判中傷した。こうした記事に扇動された保守的な地元青年の中には、英学校に決闘状を送る者さえ出現する。

熊本県知事松平正直は、同年一月二十五日に英学校に奥村の解雇を命じた。が、蔵原校長は奥村を弁護し、評議会も知事に解雇命令

の撤回を要求する。しかし、生徒会が集会を開いて知事命令の支持を決議し、評議会もこれに同調するという新たな事態を迎え、柏木義四郎ら優秀な十一名の教員は、学校側に対して知事命令の撤回を要求するものも、聞き入れられなかったため辞職するという事件に発展した。

すでに記したように、鑑三は蔵原惟郭との友情もあり、この事件には同情の立場を取っていた。それゆえ、事件後の学校側の教員補充の依頼に際しては、当時は仲のよかつたすぐ下の弟、達三郎を含む札幌農学校の卒業生に当たったりしたが、望む人材は得られなかった。鑑三は泰西学館に勤務することで、以前専任として勤務した官立学校（第一高等中学校）との経済的格差を身をもって実感していたものの、蔵原らからの教員推薦依頼に応えられなかったこともあって、自らが熊本行きを決意する。

この辺の事情と熊本生活初期の様子は、D・C・ベル宛、一八九三（明治二〇）年五月十三日付の英文書簡に詳しい。ここでも山本泰次郎訳によつて、その骨子を書き抜いておきたい。鑑三は、はじめに「文なし、心なし、信仰なし、その他の「無しども」を相手に、八カ月以上も大阪で善き戦を戦つた後、私はその地の学校を手離してしまいました。サタンの手に渡した、とは申しませんが、少なくとも運命の手に引き渡し、そしてしばらくの勤めのため、当地へ来ました」と書く。次に泰西学館の校長宮川経輝の偽善性に及ぶ。読み手は外国人、しかも英文であるからこそ、以下のように、率直にその事情を記し得たものと言えそうである。鑑三のやりきれなさは、極度に達していた。

とにかく昨秋申上げたように、私が始めて仕事に関係した時には、学校はすでに収拾すべからざる状態にあり、その起死回生のために身を投じようとする者は、私のような馬鹿者だけだったのです。組合協会の牧師で学校長なる宮川牧師は、私を学校に引き留めておく望がすっかり絶えたと知るや、親切にも私に向つて、自分や同僚は君に半年以上俸給を払うつもりは全くなかつた、ただ一つの試みとして君を迎えたに過ぎなかつたのだ！と告げてくれました。そればかりか彼は友人たちの前で、内村に近づくにはお追従さえ言えばよい、そして、この学校を破滅から救い得る者は君だけだ、と言つてやれば必ず喜んで働く、と語つた由です。この一部始終が分つた時、もちろん私は一ときも自分の位置に留まることはできませんでした。ただこんな事業にアナタのご援助とご同情とを仰いだことを、この上なく悲しみます。

鑑三にはプライドがあつた。宮川経輝の本心を知り、生徒たちには愛着があつたものの、泰西学館を直ちに去ることにして、友人蔵原惟郭が校長を勤める熊本英学校へ短期（三ヶ月）の応援教師として赴くのであつた。

熊本英学校と当地での生活

ベル宛の手紙の続きには、新たな赴任地熊本英学校と、そこで当初の生活が記されているので、引き続き引用しよう。

この熊本は九州島最大の都です。この地に私の友人で、東京

とポストンで一緒に勉強した蔵原博士が立派な学校を経営しており、ちょうど教師を一人望んでいましたので、同君の客分として、また協力者として、やって来ました。この学校は大阪のものよりははるかにしつかりしており、職員もしつかりしたクリスチャンでかためられ、その上校長は子供の時からよく知っていますので、二度と再び欺かれるおそれはありません。これは独立のキリスト教的学校で、——生徒は目下百二十名——、先月より五十名以上も増加しています。この地にもアメリカ宣教師団が伝道所を有し、私はすでにその宣教師諸君と楽しい交友を結びました。われわれはお互に近くに住んでいます。こんな文化に遠い土地で、アメリカ流の歓待を受けようことは実に愉快です。私と妻とは静かな田舎家に、善良な信者の一家と共に住んでいます。庭は大変に広く、色々な温帯植物が茂っています。出たての竹の子の成長を観察することは何よりも面白く、時には二十四時間に十インチものびます。ある朝、ちょうど私の丈けだったのが、翌朝は私の指先がほとんど届かぬほどになりました。また家にはカイコがかつてあり、四周は皆、桑畑です。目下茶摘み中で、ツツジとシャクヤクとが咲いています。天然は皆、昔ながらの力と美とを保っていますが、ただ人のみが悪にそみ、罪に死んでいます。

鑑三は熊本に来て、生き返った思いを持つ。彼を悩ました不眠症も快癒に向かっていた。妻しづにも熊本行きは、新婚旅行的效果をもたらした。「静かな田舎家」で、「庭は大変に広く」て温帯植物が生い茂るといふ環境は、二人の生活によい結果を与えたようであ

る。熊本では最初蔵原惟郭の家の二階に仮住まいし、すぐに大江村是法（現 熊本市大江町）の二階建ての古い大きな家に移った。それまで鑑三は東京の狭い家や大阪の貧しい借家暮らしで息詰まっていた。それが三ヶ月という短い期間ではあったものの、竹の子の生える広い庭があり、周囲は桑畑や茶畑で、ツツジやシャクヤクが咲く自然環境は、新婚の二人にとって神からの何よりもプレゼントと思われたことであろう。が、熊本での生活は夏までの三ヶ月で、その先のことは、目安が立っていなかった。「今秋以後どこに勤めるかは、まだ何もきまっていません」とこの手紙で鑑三は記している。鑑三の右の便りを含むベル宛の書簡は、どれもが若き日の内村鑑三という類い稀な思想家の発見を知るのに貴重である。右の便りには、続いて鑑三の著作『基督信徒の慰』の反応と以後の著作計画が記されている。以下のようなようだ。

私の著作が善い働きをしていることは感謝に堪えません。売れ行きは頗るよく、その善き働きの結果を報ずる手紙が、全国到るところから来りつつあります。もし現在只今、どんな仕事を一番望んでいるかと問われるならば、聖書の分り易い注解書を書くことを先ず第一にあげます。

在野の教育者

内村鑑三の神に捧げた生涯の発端は、ここにあった。旧約聖書三十九卷、新約聖書二十七卷、合わせて六十六卷の聖書研究は、彼の生涯の大事業となるが、その覚悟は熊本時代に早くも現れていたのである。

D・C・ベル宛の次の便り(熊本にて、一八九三・六・二五付)の一節には、「私どもは来る七月十一日に当地を去り、海浜に四週を過ごした後、秋から京都に落ちつくつもりです」とある。京都には妻しづの実家があり、しばらく過すには好都合だったのである。彼は教育事業には未練があった。自身の能力・適性も教育にあると彼は信じて疑わなかった。物事に対する知的関心、人を説得させる弁舌、自然と備わったカリスマ性、——これらは教育者には必須の条件である。それらが彼には豊かに備わっていた。重ねて言う。鑑三には教育者としての豊かな資質があったと。

しかし、現実の学校は、不敬事件を生んだ第一高等中学校のような公立学校のみならず、帰国後最初に勤めた北越学館のような私学のミッションスクールにも、さまざまな制約や問題があった。自身の教育上の主義や方策が歓迎されないのが分かるにつれ、鑑三は「教育事業」から手を引かざるを得なかった。けれども、制約の少ない日曜学校や青年たちへの教育には、生涯関心を持ち続けた。そういう意味からすると、内村鑑三は生涯在野の教育者であったと言える。以後、彼は一時勤務した名古屋英和学校を除くと、公私立を問わず、教育機関には一切携わることなく、東京に居を定めた後は、角筈の自宅で、さらに柏木に移ってから、今井館聖書講堂に恵まれ、深い聖書研究に基づいた教育に生涯当たったのである。

今井館聖書講堂に関しては、後章(第九章)で詳説する。鑑三を慕う青年たちには、早くは文学者の国木田独歩が、続いて有島武郎・小山内薫・正宗白鳥らがいた。しかし、彼らは皆鑑三の厳格な教育について行けず、その許を離れる。柏木に居を移してからは、より若い世代の一高生を中心とした優秀なメンバーが、新渡戸稲造

の紹介で、鑑三の門下生として集うようになる。鶴見祐輔・前田多聞・藤井武・塚本虎二・黒崎幸吉・川西實三・三谷隆正・森戸辰男・高木八尺・田中耕太郎・矢内原忠雄・三谷隆信らの「柏会」の人々、南原繁・坂田祐・松本実三・石田三治・高谷道雄などを中心とした白雨会の人々などである。彼らの中には、後年日本の知的リーダーとして名を残した人が多い。そうしたこととは、後章で追い述べることにしている。再び言う。鑑三は豊かな教育者としての資質に恵まれていたと。それが発揮できないところに、当時の彼の遣り場のない苦しみ、苛立ちがあったのである。

著作による収入

この頃、鑑三は著作による収入を考え始めていた。彼の初期の優れた著作は、苦難の中で書かれている。処女出版『基督信徒の慰』をはじめ、『求安録』『略得記』『後世への最大遺物』、訳詩集『愛吟』など、皆然りである。英文で書かれた *How I Became a Christian* (余はいかにしてキリスト信徒となりしか) もこの時期のものである。これは自身の日記を基に、読者対象をアメリカ人に限定して書かれた。が、アメリカでの刊行はなかなか進まず、結局、昵懇となっていた福永文之助の警醒社書店から英文のまま刊行(一八九五・五)された。これらの著作には当時の鑑三の現実の反映が認められる。当初はやり切れない現実からの解放としての執筆活動であった。が、それが著書となって世に出、好評を博すると、彼は己の才能がここにあったかと思うようになる。

鑑三はもともと書くことが好きであった。父から教わった四書五経、少年時代から受けた英語教育、札幌農学校時代からの聖書の熟

読、それにヨーロッパ文学への親炙、さらには留学時代にふれたヨーロッパ諸国語、また、ヘブル語・ギリシャ語など聖書研究に落すとすことの出来ない言語の習得は、彼を優れた言語表現者にもしていた。彼には文章表現でも、口頭表現(講演や説教)でも抜群の能力が具わっていたといえよう。初期の『基督信徒の慰』は、文章表現の代表であり、後述する『後世への最大遺物』は、もともとは口頭表現であったものを文章化したものである。鑑三は日本語ばかりか英文でも優れた文章を書いた。その代表は、右にあげた *How I Became a Christian* である。彼は文筆家として生きることを決意する。その主要な舞台は、後年の雑誌『聖書之研究』であることは、言うまでもない。

『基督信徒の慰』の出版上での成功は、彼に物書きとして生きること覚悟させた第一歩であった。世は新しい歩みをはじめていた。書くことで生活を維持する志向は、なにも鑑三独りに留まらなない。当時の知的青年一般の動向とも重なる。一八八五(明治一八)から翌年にかけて、坪内逍遙が文学理論『小説神髓』を刊行して以後、二葉亭四迷の『浮雲』(二八八七―一八八九)にはじまる近代小説の試みが続き、一方、尾崎紅葉・山田美妙などが硯友社という文学結社を興して、小説を書く青年が出る。また、三宅花圃・樋口一葉ら女性作家の誕生もあって、文章活動が生計を助けるという気運が盛り上がっていた。しかも、彼らの書くものには、娯楽中心の江戸戯作とは一線を画すものがあつたのである。

前章で詳しく述べた『基督信徒の慰』をはじめとする内村鑑三の初期の文章活動も、近代の意識に目覚めたこれらの人々の表現活動と、まったく無縁とは言えないであろう。鑑三は漢文や和文のみな

らず、英文でも多くの本を読んでおり、日本語の表現活動にも長けていた。そうした中で生計を助けるため、なにがしかの金銭を稼ぐ、その方法としての文章活動に、彼はいつか慣れ親しんでいく。彼はその才能にも恵まれていたと言えよう。私小説ふうの『基督信徒の慰』や訳詩集『愛吟』は、この時期の彼の代表作でもある。

『基督信徒の慰』に続いて、鑑三は『紀年論文コロム布斯功績』を前著と同じ警醒社書店から刊行した。奥付によれば、前著刊行二日後の一八九三(明治二〇)年二月二十七日の刊行であり、立て続けの刊行であった。鑑三は『六合雑誌』の前年九十一月号(四一―四三号)に、「コロム布斯文学」「コロムブスの行績」「米国発見事業の事務官ビンゾン兄弟」を発表していた。また、コロム布斯に関する史伝を『基督教新聞』の四八三―四八九号(一八九二・一〇・二八―一・四)に連載した。本書はこれらの論文を集め、一本としたものであった。

警醒社書店の出版

発行元の警醒社書店は、日本のプロテスタント最初の超教派に立つ出版社であり、現在の新教出版社の前身の一つでもある。創立は一八八三(明治一〇)年七月で、発起人は植村正久・湯浅治郎、小崎弘道らであった。当時は福永文之助が社長を務めていた。福永には『回顧二十年』(警醒社書店、一九〇九・一〇)という編著もあるが、キリスト教出版に生涯を捧げた人物である。彼は『七一雑報』、続いて『福音新報』を創刊した今村謙吉の許に少年文選工として入ったのが、キリスト教出版とのかかわりであった。西阪保治・河本哲夫・秋山憲兄著『日本キリスト教出版史夜話』という小冊子ながら

貴重な証言集がある。本書の冒頭に西阪保治が「日本文書伝道の発祥」を書いていて、中に「今村謙吉と福永文之助」、それに「警醒社の出版」と題した項目がある。今村謙吉は金沢の士族の出で、当時は神戸組合教会の会員で、英国聖書教会の邦語訳聖書など、キリスト教出版物の印刷製本を手広く行っていた。以下、『日本キリスト教出版史夜話』から今村と福永のかかわりに関しての、さわりの部分を引用しよう。

今村謙吉の印刷所に働く工員は五十余名その中に福永文之助という少年文選工がいた。工場主は聖日を厳守し、工員を引きつけて自分の属する神戸組合協会に出席した。そうする中に、少年文選工福永は遂に入信、松山高吉牧師から受洗、のち主人の信用を得、抜擢されて当時元町に、今村が印刷所と共に経営していたキリスト教書店福音社の主任となった。この福永こそ、警醒社を経営した福永文之助なのである。

福永は紀州熊野の産、今村の工場に入ったのは年齢十八、幼名を熊之助といったときが、もし、それに誤りがなければ、紀州の山奥から出て来た熊さんは、その一生をキリスト教の文書に奉仕する文さん、文之助になったわけである。(以上、「今村謙吉と福永文之助」)

これより先、東京では文書によるキリスト教宣教を目的とする何らかの団体あるいは会社の如きものを作ろうという議が牧師有志の間に持ち上がった。結局湯浅治郎、植村正久、小崎弘道らの諸氏が、その肝煎役となって出発したのが警醒社である。その後、この警醒社の経営がむずかしくなったのを聞いて

た今村謙吉は、直ちに福永を上京させたのである。この時から警醒社の経営は福永文之助の手に引きつがれた。かくして、その一生をキリスト教出版に捧げつくした福永文之助の功績は今さら言うまでもないが、明治の中期より大正を経て昭和の中期に至る約七十年の間に、警醒社が発行したキリスト教書類の数は約二千種、発行部数は五十万、著書もまた六百を数えるのである。特に庄巻は、一九一一年(明治四四)に刊行された高木壬太郎著『基督教大辞典』であろう。(以上、「警醒社の出版」)

内村鑑三が右のような経歴の福永文之助と出会ったのは幸運であった。鑑三が福永と親しくなるのは、不敬事件一年後、生活困窮の最中であつた頃のことである。年譜(内村鑑三全集40)収録には、一八九二(明治二五)年一月のところに「日本組合基督教会京橋講義所で毎日曜日朝の聖書講義、夕の説教の担当にきまる」とある。一八九二年一月とは不敬事件からちょうど一年後に当たる。この京橋講義所(教会)時代に鑑三は福永文之助と知り合う。当時福永は京橋講義所に通い、教会の会計係をし、月々の謝礼を渡す役割を担っていた。

福永文之助

福永は鑑三の力強い説教と祈祷に、深く共感するところがあり、何かと便宜を図るのであつた。警醒社書店は東京京橋にあり、京橋講義所とも近かつたので、鑑三は以後しばしば立ち寄りすることになる。福永はそれを喜び、来れば鑑三好みの鰻井と羊羹とを出しては歓迎したという。鑑三が京橋講義所を去り、大阪の泰西学館に赴任

するのは、同年九月のことであるから、福永文之助との交流は、この時期がピークであったようだ。

鑑三が『基督教新聞』（二八九二・九・二、九）に載せた「未来概念の現世に於ける事業に及ぼす勢力」という論文を、警醒社書店から小冊子として出したのは、泰西学館時代の一九九二（明治二五）年十月二十四日のことで、厳密に言うなら鑑三の最初の著書となる。が、なにぶん小冊子ゆえ、これを以て処女出版とはいえない難い面があるとは、前章でもふれたところだ。

そこで世上一般には鑑三の処女出版は、『基督教信徒の慰』とされるのだが、それはともかく、鑑三が警醒社書店の経営者（社長）の福永文之助と知り合った意味は大きい。鑑三初期の代表的著作の多くが、警醒社書店から出るようになるからである。書物は著者に惚れ込んだ出版人やパトロンがいて、はじめて後世に遺るものだ。その意味では鑑三は常に恵まれていた。後述するところだが、鑑三の代表的著作とされる『羅馬書の研究』（向山堂書房・聖書研究社、一九二四・九）にしても然りである。これは鑑三ファン（古賀貞周）が出版費用を全額提供し、七〇〇ページを優に越す美本として日の目を見たものであった。なお、『羅馬書の研究』に関しては、第十一章で詳説する。

二 京都に移り、著作に打ち込む

舞子の浜の夏期学校

一八九三（明治二六）年七月十一日、鑑三と妻しづは熊本を去り、しばらく須磨に滞在の後、京都に落ち着く。京都には妻しづの実家

があり、何かと好都合だったのであろう。須磨ではこの後記すが、舞子の浜で開催された基督教青年会の第五回夏期学校に参加し、演説（講演）をしている。後年鑑三は、「故横井時雄君の為に弁ず」（『聖書之研究』三三四、三三五、一九二八・五〇六）を書いた折、この演説を回想して次のように書く。

舞子の浜に開かれし青年会の夏「期」学校に於て、横井君が現世的基督教を主張せられし後を受けて、私は同じ高壇に立ちて来世的基督教を主張しました。至つて仲は善くありましたが、宗教論を闘はすたび毎に議論は終に物別れになりました。要するに君は外に広がらんと欲し、私は内に深からんと欲したのであります。

現世的基督教と来世的基督教とは、なかなか含蓄に富んだことばだ。しかも、二人の神学的立場の違いをはつきりと示している。横井の後半生の悲劇が現世的基督教にあったことも語っているかのようだ。この夏期学校で鑑三は海老名弾正に会い、熊本英学校の近況も伝えた。前述のように海老名は熊本英学校の初代校長であり、話は当然熊本の英学校の様子にも及んだ。海老名弾正は、その時の様子を以下のように記している。

内村君が悲境にあつた頃、熊本の英学校でひそかに教鞭を取つて呉れた事がある、その学校は私が建てた学校である、然し私に相談した訳ではない。その帰りに須磨に夏期学校があつた時である。熊本の英学校といふのは当時蔵原惟郭君がやつてを

つたが、学校に問題があつた。それは宣教師と蔵原君との衝突であつた。私は宣教師を迎へた方で、宣教師に半分、蔵原君に半分の態度を取つてゐた。内村君が言ふのに、「海老名君、学校は蔵原君に一任だよ、あれは一生懸命にやつてゐるから、あれにやらせるより他ないよ」と。斯くして私が内村君の勧告を採用した——兎に角私を決心せしめたといふことがある。

鑑三はアメリカ時代からの友人蔵原惟郭を信じていた。鑑三の熊本滞在は、わずか三ヶ月とはいへ、新婦のしづとの新婚生活でもあり、また、先にも記したように、寄寓した大江村是法の家の庭は広く、季節は春とあつてさまざま花々、竹の子など珍しい植物の観察も出来、鑑三としづにとつてはよき体験であつた。学校はもともと三ヶ月の臨時採用であり、不満があつて辞めたのではない。このことは強調しておきたい。それゆゑ蔵原惟郭には感謝の念はあつても不満はなかつたはずだ。

舞子の浜の基督教青年会夏期集會は、この年七月八日から十九日まで、十二日間にも亘つて開催された。ちょうど各学校は夏期休暇中で、出席者は六三四名もの多くを数えたとされる。各地のミッシヨンスクールの生徒も多く参加した。鑑三は期間全部の参加ではなく、後半に加わり、十七日の講演會に合せて参加したものとと思われる。それまではしづと旅館に籠もり、ひたすら原稿執筆に当たつたのであろう。

『基督信徒の慰』再版(明治廿六年八月一四日刊行)の「第貳版に附する自序」には、「明治廿六年七月十八日 鉄拐山の麓に於て」とあることからすると、この再版の「自序」は、夏期集會の講演會

翌日に書かれたことになる。鉄拐山とは源平の古戰場として名高い、六甲山地南西端の山である。

居を京都に移す

さて、舞子の浜の基督教青年会第五回夏期集會に参加し、無事講演も終えた内村鑑三は、前述のように八月には居を京都に移した。何度も書くが、京都は妻しづの実家のある街である。当初彼は妻の實家、岡田家の下立売通室町の家は何日か寄寓し、やがて近くの京都市上京区小川西大路町五に居住することになる。定収入もない極貧の日々であり、おそらく岡田家から多少の生活援助を受けていたものと思う。しかし、それは自尊心の強い鑑三には、屈辱以外の何物でもなかつたのである。

鑑三に師事した政池 仁が後年、鑑三夫人(しづ)からの直話などとして伝えるところでは、「彼女の実家の父母が心配して彼女に公債証書などを渡してくれたこともあつた。しかし、それはわずかであつて、後年内村は「僕らが今日あるを得たのは岡田の父が、僕らがどんなに貧乏しても放つておいてくれたからである」と語つたとある。

政池 仁は右の証言に続いて、「ある年の暮、内村が岡田家を訪問した際、岡田の両親は正月になつても餅もつけないだろうと察して、みやげに餅を贈つた。内村はこれを持ち帰る途中、鴨川にかかつている一つの橋の上に来た時、「男子が正月の餅をさえ他人に恵まれるとはなさない」と言つて、それを水の上に投げ込んでしまつたという話が残っている」と書く。出典は定かでないが、鑑三ならば、さもあらなと思わせる逸話であると言つてよい。

折角の餅を鴨川に捨てた話しは、新保祐司の『内村鑑三』^⑨にも出てくる。こちらは餅を捨てるために、鴨川まで行ったことは、生活をどうすべきか何かと考えあぐねて歩きまわったことの証であるとする。新保はまた鑑三の京都時代を、「信仰的ドン・キホーテ」であったと書する。京都で鑑三は、今後の生活をいかにすべきかに思いを巡らす。教師生活には未練があったものの、とりあえずは生活の糧を得るには、書いて稼ぐほかなかった。彼は妻の実家に近い家で、終日執筆に励むこととなる。一方で関西学院基督教青年会を助け、依頼されるならば演説(講演)をしたり、三高基督教青年会の日曜学校での聖書講義を引き受けたりした。

先に題名のみ挙げた訳詩集『愛吟』は、この時期にまとまった。そして、一八九七(明治三〇)年七月五日、これもまた福永文之助の警醒社書店から刊行されている。『国民之友』をはじめ、いくつかの雑誌や新聞が取り上げ、鑑三言うところの(精神訳)の意味を論じている。現全集の「解題」(亀井俊介担当)では、『愛吟』を、原詩を基とした「鑑三の半創作的な翻案詩」と評している。なお、亀井によると、「この詩集は、内村鑑三の生前に二五版を重ね、彼のもよく読まれた本のひとつとなった」とのことである。

わたしは『愛吟』が当時の日本の青年層に、どのように読まれたかに関心があったが、森本穂の『阿部知二原郷への旅』^⑩に、その例のいくつかを見ることができた。森本は阿部知二研究の途次で、知二の従兄弟で、志半ばで肺病で亡くなった阿部舜次という人物に注目する。森本の調査では、舜次は明治文化史研究家となる木村毅とも親戚関係があり、木村は舜一から英語を学び、同時に鑑三訳の『愛吟』を勧められ、読んだという。そうした『愛吟』にまつわること

どもを、入念な調査で明らかにしている。また、同じ頃の正宗白鳥も、鑑三ファンであり、『愛吟』の愛読者であったことも指摘する。

国木田独歩が訪れる

鑑三はこの時期、次々と書物をまとめた。彼は文章を書いて本にすることが、経済的に多少生活を潤すことを知って、それが生き甲斐ともなっていた。自己の考えを他者に理解してもらうには、演説(講演)もいいが、書物に勝るものはない。たとえ五〇〇〇〜一〇〇〇部ほどの小出版であろうと、書いたものは、なにがしかの金銭となり、それは永遠に残る。しかも、それが己の生きた証明ともなることを彼は知ったのである。

熊本から京都に移った頃の内村鑑三には、文筆生活こそ己にふさわしい仕事であるという考えが次第に分かりはじめて来たのである。彼は己に鞭打って日々執筆に当たった。幸い彼を支え、その出版を支えた書店があった。先に触れた東京京橋の警醒社書店がそうであり、この年(一八九三)年七月下旬に脱稿し、十二月十五日の日付で刊行された『貞操美談 路得記』^{ルツキ}を刊行してくれた大阪の福音社もそうであった。

福音社は先に警醒社書店のところで触れた今村謙吉が、大阪の土佐堀ではじめた出版社であり、当初は印刷、製本、書籍販売を業としていた。その後、今村が金沢から呼び寄せた矢部外次郎の手に移り、「場所も新町通りに移転、大阪における唯一の聖書、讚美歌、キリスト教書類取扱販売店福音社となった」^⑪出版社である。『貞操美談 路得記』の内容や反響に関しては、この後に述べることにしている。

ところで、京都時代の鑑三の許に、彼を慕う国木田独歩が訪れるのは、一八九六(明治二九)年の夏のことであった。独歩は一八七一(明治四)年八月三〇日、千葉県銚子市の生まれで、広島や山口県で育つ。鑑三とは十歳ほどの年齢差があった。東京専門学校(現早稲田大学)英語政治科中退。早くからワーズワースやツルゲーネフ、カーライルなどを愛読する。一八九一(明治二四)年一月、日本基督教會一番町教会で、牧師植村正久より洗礼を受けている。独歩は徳富蘇峰の国民新聞社勤務時代『国民之友』(三三三〜二五二号、一八九四・八・二三〜一八九五・四・二三)に連載された鑑三の「流竄録」を読み、はじめてその存在を知ったという。「流竄録」は鑑三のアメリカ時代、エルウインの障害児施設で半年ほど働いた時の体験が基になって生まれた話である。近年の河内重雄の労作『日本近・現代文学における知的障害者表象』では、独歩の「春の鳥」は、「流竄録」のかかわりが強く意識された小説との考えを示す¹³⁾。

「欺かざるの記」の鑑三評

独歩が尊敬していた鑑三と、書信を通して親しく交わるようになるのは、徳富蘇峰の民友社に入り、『国民之友』の編集に従うようになってからのことである。独歩は一八九一(明治二四)年一月の鑑三の関わった不敬事件を深く心に留めており、彼を慕い、やがては書信の交わりがはじまる。独歩が「流竄録」にはじめて触れたのは、日記「欺かざるの記」によれば、一八九四(明治二七)年八月二十六日のことで、翌一八九五(明治二八)年一月二十二日の「欺かざるの記」には、「昨日内村鑑三氏の流竄録を読んで、突然一ツの恐ろしき決心吾が胸間に浮び出でたり」ともある。とにかく独歩

は、この尊敬する先人の言行に無関心ではいらなかったのである。

この年四月から、独歩は『国民之友』の編集に携わるようになり、鑑三と書信を介しての深い交わりを得ることになる。まだ電話など十分普及していなかった時代ゆえ、手紙での交流は重要な意味を持った。「欺かざるの記」の一八九五(明治二八)年六月十日の項には、「内村鑑三君と書信の交を結びたる事、吾れ非常に此の剛毅なる人物を慕ふ事」とある。そして十九日の項に「内村鑑三君より来状ありたり」とあるので、その交わりがはじまったことが判る。七月六日の項には、「内村鑑三氏との交りをして益々真率深情ならしめ給へ」とあり、十一日の項には「夜、内村鑑三氏のハウ、アイビケームエクリスチャンを読む。明日は必ず読み了はらざる可からず」と出てくる。が、この時点でも、未だ独歩は鑑三に直接会ってはいない。

この頃、独歩は明治の女権運動家となる佐々木豊寿(新宿中村屋を創設する相馬黒光の叔母にあたる)の娘信子と恋愛関係にあった。独歩は信子との新婚生活の地を北海道の山林に持つ夢を抱くようになり、鑑三に相談する。独歩はこの時点でも、鑑三に直接会ってはいない。けれども、鑑三は当時母校札幌農学校の助教として札幌に在住していた新渡戸稲造あての紹介状を独歩のため英文で認めている。こういう点で鑑三は親切であった。

国木田独歩は鑑三の作品を読み、彼を「剛毅なる人物」と認め、京都まで会いに行った。留学費用の一部でも援助して貰えるのではないかという期待も、密かに懐いていたに違いない。が、京都時代の鑑三は極貧の極みにあり、生計を維持するのが、やっとの状況で

あった。当時、鑑三は処女出版『基督信徒の慰』を刊行し、好評であった。けれども、それが多少売れたとはいえ、高が知れていた。鑑三は駆け出しの貧しい物書きに過ぎなかったのである。が、物書きの収入など、ほんの僅かにすぎないことを独歩は理解できない。そして、留学費用など、過大な期待を鑑三に抱いての京都入りだった。

それは、貧窮のどん底で、乗車賃を工面して京都まで来た独歩が、便利堂という義侠心に富んだ出版・古美術商の主人の食客であった鑑三に頼るといふ構図である。鑑三には財政的には何も出来ない。それでいて大言壮語してはばからない。結局、独歩は京都まで行ったものの、鑑三によるキリスト教の感化も受けることなく終わった。以後の独歩については、次章(第八章)で述べることにしたい。

三 『求安録』の世界

上・下二部構成

京都時代の鑑三が『基督信徒の慰』に次いで書き下ろした単行本は、『求安録』であった。この書は彼の大阪時代に大半が書かれ、熊本滞在中に推敲され、「自序に代ふ」を含めての書物の体裁が整えられたものである。「自序に代ふ」の最後に鑑三は、「明治二十六年六月七日 東肥託摩ヶ原流寓に於て」と記している。「東肥」とは「東肥後」で、「託摩ヶ原」とは、現在の熊本市東区に相当する丘陵地の地名である。不敬事件後第一高等中学校を追われ、大阪の泰西学館勤務を経て熊本まで来た鑑三には、託摩ヶ原(大江村是法)の家は、自然に恵まれたよき家ながら、一時の仮住まいであり、ま

さに「流寓」の名にふさわしいと思われたのであろう。

内村鑑三は、熊本の家で『求安録』を完成させた。もっとも、刊行は京都に移ってからのもので、刊行元はこれも東京の警醒社書店である。幸い半年前に同書店から出した『基督信徒の慰』の売れ行きは、まずまずであった。書店の経営者(社長)は、もはや呢懇の間柄となった福永文之助である。鑑三は「自序に代ふ」を添えた原稿に「目次」を添えて警醒社書店に送った。その目次は、以下のようである。

求安録目次

上の部

悲嘆

内心の分離

脱罪術 其一 リバイバル

脱罪術 其二 学問

脱罪術 其三 自然の研究

脱罪術 其四 慈善事業

脱罪術 其五 神学研究并に伝道

亡罪術 其一 「ホーム」

亡罪術 其二 主業説

亡罪術 其三 楽天主義

下の部

罪の原理

喜の音

信仰の解

楽園の回復

贖罪の哲理

最終問題

罪との格闘の書

上・下二部から成る『求安録』は、罪との格闘の書と言えようか。上の部の冒頭の「悲嘆」は、「人は罪を犯すべからざるものにして罪を犯すものなり」にはじまり、人間存在の矛盾の実態を示す。続いてその矛盾の様相を、「彼は清浄たるべき義務と力を有しながら清浄ならざるものなり」とし、さらに「天使」と「禽獣」、「天上の人」と「地獄の餓鬼」、「栄光」と「墮落」という人の持つ矛盾の特性が対比的に示され、いかにすべきかが問われる。そうした矛盾の中にあつても、「何よりもよき事は神我等と共に在す事なり」で結ばれる。

続く「内心の分離」では、鑑三自身と思われる人物（余）と称される（「罪人」）の告白がなされる。

余は故意を以て人を欺きながら余の罪人なるを知らざりし、余は虚言を吐くを以て意に介せざりき、余は他人の失策を見て喜び、他を倒しても自己の成功を願へり、余の目的は高名富貴にありき、余は国を愛すると揚言しながら余の野望を充たさんとせり、余は他人の薄情卑屈を責めながら自分も常に他人の不利益を望めり、余は君子振りて実に野人なりき、余の目的は

卑陋なりし、余の思想は汚穢なりし、是を思ひ彼を思へば余は実に自身に恥て若し穴あれば身を隠し神にも人にも見へざらん事を欲せり。

余は偽善者なり、人を殺すものなり、姦淫を犯すものなり、盗人なり、而して聖書なる電気燈を以て尚ほ余の心中を探るならば余は神を穢すものならん、人を欺くものならん、——嗚呼、聖書の言をして誤謬ならしめよ、余は如斯光輝に堪ゆる能はざるなり。

こうした罪からの解放は、如何にしたらよいのか。それが以下の脱罪術と題された一〜五と、亡罪術一〜三で問われるのである。脱罪術の一は、「リバイバル」と題され、この世に流布するキリスト教のリバイバル運動が語られる。「余」と称する人物は、某教会で行われた集會に、学者の精神を以て臨む。が、それは失望に終わる。「彼等は熱涙を流して余の爲めに祈り呉れたり、而して彼等の言語は真情より出づるが如く、余をして知らずくもらひ泣をなさしめたり、彼等の謂ふ所余の実験に的中せし事」多く、心を打つ。また、リバイバルを主張し、賛成する人に学識才能を持つ教師がいたこともあつて、彼らの祈れという勧めもあつて、「余」は祈るが、その恩沢はなく、失望する。鑑三は以下のように書く。

余は終に失望せり、余は余の罪の普通人の罪に勝りて多ければ神は余に聴かれざらんと思へり、他の兄弟姉妹は天よりの特別の御恵に就て互に喜び共に神に感謝しつゝあるに、余一人は孤

見の如く、捨兒の如く、感謝すべきの恩恵なく、表白すべきの
 歡喜なく、神に捨てられし如く思ひ憂鬱の上に憂鬱を加へ、懐
 疑前日に十倍せり、而して時の教勢たるリバイバルを受けざる
 ものは信徒にして信徒にあらざるが如くなりし故、余は自然と
 信徒社会を避け、教会は余を厭ふに至れり。

短絡的信仰への批判

これは当時はやりの、否、今日でも人々が囚われがちの短絡的信仰への批判でもある。信仰の行き詰まる時、いわゆるリバイバルと称する信仰復興運動が起こる。日本でのそれは、横浜海岸教会の一八八三(明治一六)年初週祈禱会で、J・H・バラが自身の悔い改めを告白したのにはじまるとされる。鑑三が札幌県御用掛として勤務していた頃のことである。彼がこの年五月八日から十二日まで開かれていた東京築地の長老派の新栄教会で開かれた第三回全国基督教信徒大会に札幌教会を代表して出席した頃、明治日本でのリバイバル運動はピークに達していた。

この運動のことは、*How I became a Christian* (「余はいかにしてキリスト信徒となりしか」)にも出てくる。大会の様子と鑑三の感想・批評が述べられている箇所だ。鑑三は集会に出席し、いわゆるリバイバル運動がどのようなかを体験する。彼はその様子をかなり入念に書き留める。そこでは「五月十二日 大会終わる。その結果は驚くべきものだった。教会は復興し、良心は試みられ、愛と一致とは著しく強められた。その全体の性格が実にペンテコステ的だった」と彼は書いている。が、続けて「しかし精神生理学について多少学んだことのある私には、この運動は何か病的なものに見えた」

とも言うのである。

『求安録』を書いた鑑三には、冷静な判断力があつた。彼には一時的興奮の中で、罪からの解放が実現するとはとても思えなかつた。彼にはそうした判断力が、理性が先行した。「此時に当て余を信仰上の大失敗より救ひしものは余の有せし至少の科学上の智識なりき」と彼は言う。リバイバル信仰復興への科学者としての批判が、ここに見られると言えよう。

「脱罪術 其二 学問」の冒頭で、彼は「急劇的奇跡的变化の希望全く絶へて余は普通理達の示す法に依て罪の苦痛より免かれんとせり、而して余の以て頼むべき途と信ぜしものは専心以て學術研究に従事し罪てう念より脱せんとするにありき」と書く。彼は「罪の苦痛より免かれんとすれば罪を見ざるにしかず」とも言う。彼はまた、ダンテやシェークスピアやゲーテの世界に遊ぶことで、罪を忘れようとした。が、「然れども之れ一時の感なり」と言い、「学は罪よりの隠場所にあらずして反て之を顕明ならしむるものなり」との冷静な判断力を示すのである。

「脱罪術 其三 自然の研究」では、「学は人為なり故に我を癒すに足らず、我は人の造らざる自然に行かん」と書き、一時「身を自然物の研究に委ねたり」と言う。ここには札幌農学校卒業後の鑑三の歩みが重ねられていく。が、「自然物は我心中の病を治する能はざるなり」とする結論には、自然の研究には限界があることを知った者のことばと受け取れる。「自然は病める靈魂を医する上に於て大助力たるに相違なし、恰も清浄温暖なる空気は結核病患者を治する為には大効力を有するが如し、然れど腔内の黴毒は外用剤の達し得べきにあらず、罪てうもの若し心靈の病なれば之を癒すものは心

霊的の力ならざるべからず」とのことばが導き出される。ここに「心靈的の力」の必要が、クローズアップされるのである。

慈善事業の裏面

「脱罪術 其四 慈善事業」は、「教師も教会も学問も自然も余の心中の痛」を癒やすことを知った「余」と称する主人公(鑑三と重ねて読んでよいが、書き手は自己を突き放し、客観化した眼で眺めている)は、「慈善事業を以て一世の目的と定めたり」とする。ここには鑑三のアメリカにおける養護施設の介護人体験が反映している。以下のように、鑑三は書く。「鶏鳴未だ曉を告げざる前に起て病者のために衣食を整へ、その靴を取りその足を洗ひ、その僕となりその給仕人となり、発せんとする余の短気を庄へ、熾んとする余の慢心を静め、以て偏に基督の温順と謙遜とに倣はんとせり、患者に靴をもて蹴らるゝ時、面部に唾せらるゝ時、余は之れぞ救主の忍耐を学ぶべきの機と思ひ、温顔を以て彼に対し、微笑を以て彼に報いたり」と。

が、こうした経験をしなから、他方で主人公の「余」は、慈善にまつわる偽善に気づかざるを得ない。その結果、彼は「安心術としての慈善事業の無益なるを悟る」のである。そして「慈善は幾多基督信徒の躓石となりし」とまで言い、次に「脱罪術 其五」では神学研究と神学校(伝道)の問題へと向かう。彼は「外国伝道会社又は欧米宣教師に依て衣食する」者を嫌う。ここには札幌農学校時代のキリスト教体験が反映しているとしてよい。彼は言う。「伝道師てうものを見るに多少攘夷的の観念を以てし、時に或は国賊視する事もなきにはあらざりしなり」と。

鑑三を思わせる「彼」は、決心して「主よわれは いまぞゆく／十字架の血にて／あらひたまへ」の讚美歌を励みに、「終に意を決し慈善病院を去て神学校」に入ることになる。この記述も鑑三のアメリカ体験と重なる。彼は神学研究のため神学校に入る。が、現実の神学校は「辛苦は一つも受けしことなし」で、「余」の注意を惹いたのは、「生徒の楽すぎる事なりき」であつたという。二十時間以下の授業、五ヶ月間の夏休み、その他の点でも恵まれ過ぎた環境は、「余にして若し最小の生存競争を以て一生を終るを目的となすならば余は神学生となり、後、伝道師となりて世を渡るも若くものならん」との感想を懐かせるものさえあつたという。ここでの批判は、こんにちの日本のプロテスタント教会系の神学校や神学大学にも当てはまる。

神学校教育にメスを入れる

内村鑑三は批判的精神に満ちた人であつた。それゆえ神学校教育にも鋭いメスを入れる。彼は聖書研究を何よりも重んじる。その立場から、神学校の教育にあえて不満をぶちまけるのである。彼は言う。(神学校では)「悲ひかな聖書研究はその一部分なりき、曰く聖書歴史、曰く教会歴史、曰く弁護学、曰く聖書神学、曰く実験神学、曰く組織神学、曰く聖音楽、曰く雄弁学、曰く説教、曰く牧会学、余は其他を記臆せず、一救霊術何又煩雜の甚だしきや」と。ここにはアメリカハートフォード神学校での彼の体験が反映しているとしてよいであろう。彼はこの神学校に四ヶ月いたただけで、神学校での勉強を断念するのであつた。健康上の理由との見解もあるが、より真実に近いのは、『求安録』に記されているような内容の神学教

育への失望感にあつたとしたい。

つまり、聖書研究という原点をおろそかにする神学校教育に、す
るどいメスを鑑三は入れるのである。小原信は鑑三の「アメリカ
的な神学教育」への失望感を、次のようにまとめる。

アマストで回心した鑑三は、もはやありきたりのアメリカ的
な神学教育、とくに牧師養成のためのプログラムには期待でき
なくなっていた。たとえば給料いくらの牧師館つきどころが
ここだ、というふうに、掲示板に案内が出ていたりすると、も
う生来の拒絶反応を示してしまうのであつた。

鑑三は自身の納得できる信仰や神学教育を求めていた。が、それ
は過去の彼の受けたアメリカでの神学校教育では、叶えられるも
ではなかつた。

次に彼は「亡罪術」と題して、〈求安〉とはいかなるものかを考
えようとする。〈其二〉は、「ホーム」である。鑑三によれば、「ホー
ム」は「美しき詩人的の夢想」であつて、「不満なき家族、悲歎な
き家族、煩慮なき家族」など実在しないと言う。そして「世に理想
的の「ホーム」を作り得ずして失望するもの多きは、「ホーム」を
以て客観的の楽園と見做すもの多ければなり」と結論づける。ここ
にも鑑三の体験の一部が反映していることは確かである。

利欲主義とオプチミスム

「亡罪術 其二」は、「利慾主義」(目次には「主楽説」とある)と題
される。鑑三は「慾とは社会組織の土台石なり、愛と云ひ仁と云ひ

恵^{けい}と云ひ義と云ひ皆慾てふ最大原動力の変幻なり」と言い、「我の
竊^{せう}まざるは罪なるが故に竊まざるにあらずして、竊むは我に不利益
なればなり」との理解を示す。いかにも鑑三らしい考えだ。鑑三は
「主楽説」を安易に否定しない。彼は言う。

抑^{おそ}も主楽主義なるものは之を厳肅なる清^{ピュア}クリン^テを以て鍛
錬されたる英米国民の中に伝布さるゝも国民は其害を感ずる事
至て小少なるべし、否、反て国民の思惟力を磨し迷信頑愚を排
除するが為に多少の功力あるならん、恰^{あた}も強健なる身軀を有す
る人に取ては「アルコホル」飲料其他の刺激物は少しも害を感
ぜざるのみならず時には反て多少の利益するが如し、然れども
固有の動物慾を支那或は印度の微弱なる道德律を以て僅に庄抑
し来りし我国の如きに於て主楽主義を其儘輸入するに於ては其
危険害毒は実に名状すべからざるなり。

さらに「社会が殺人罪を罰するは罪なるが故に罰するにあらずし
て社会組織を維持せんが為めに罰するなり」と言う。そして「汝慾
心の為めに悲しむは愚かなり、迷信なり」とし、「人類の歴史は慾
の歴史にあらずして何ぞや、戦争とは慾の衝突なり、政治とは慾の
折合いなり」とまで言う。鑑三は慾を否定しない。彼は「両米大陸
を開明人種の幸福なる住処と変ぜしものは慾なり、英国に最も強固
なる憲法政治の起りしも慾の結果なり」との理解を示す。

「亡罪術 其三」は、「オプチミスム(楽天教 附ユニテリアン
教并に「新神学」(目次には「楽天主義」とある)と題される。鑑三は
「オプチミスム(楽天教)」を罪を忘れるためのごまかしの技術とす

る。ここも彼の体験が反映しているものの、突き抜けて普遍化した見解が述べられる。オプチムスムは、当時流行した「新神学」(自由主義神学)とも重なる。彼は言い、そうした考えの欠陥を衝くのである。彼はリバイバルや学問・慈善事業・伝道、それに「世の称する亡罪術」には、一として功力を有するものなし」とまで言う。

罪と救安

『求安録』の下の部は、「罪の原理」にはじまる。ここは「罪とは何ぞや」の間にはじまる。また善とは、善事とは何かを問う。鑑三は聖書に照らしてその回答を得ようとする。結論は「善を学ぶは神に近づくなり」であり、「聖書は善人を以て「神と共に歩むもの」(創世記五章廿二節)となせり」とし、「神を離れて偶像に仕ふるは善を去て悪を行ふなり」と結論づける。鑑三はゲーテやミルトンや宗教改革のルーテルその他、彼の知識を動員しながら「罪の原理」を考えようとする。「嗚呼メシアは未だ降らざるか、宇宙は絶望の上に立てられしか、神は存せざるか、人は捨てられしか」と彼は問いつつ、以下「喜の音」「信仰の解」「楽園の回復」「贖罪の哲理」「最終問題」の五項目を立てて、求安とは何かに及ぶ。

はじめの「喜の音」は、旧約聖書「イザヤ書」四十章一―二節の引用にはじまる。鑑三は、「失望暗夜に此声あり」と記して、この有名な箇所を書き抜く。

なんぢらの神いひたまはく、なぐさめよ、汝等わが民をなぐさめよ、懇ろにエルサレムに語り之によばり告よ、その服役の期すでに終り、その咎すでに赦されたり、そのもろくの罪

によりてエホバの手よりうけしところは倍したりと。

この箇所は、鑑三を生涯の師として慕った弟子の矢内原忠雄が、二十四歳の若さで死んだ妻愛子の死に際して、その原因が自分にあるとして苦しみ悩んだ際に浮かんだ聖句でもある。矢内原忠雄はむろん鑑三の『求安録』を愛読し、「イザヤ書」四十章一―二節も暗記するほど脳裏に刻みつけていたものと思われる。当時の矢内原忠雄は、妻の死という現実を前に苦しみ悩んでいた。

彼は言う。「浅間山麓の離山を、泣きながら何度上つたり下りたりしたか解らない。自分の涙で以て離山が解けてしまふかと思ふぐらゐであつた。さうしてゐる中に突然「なぐさめよ汝らわが民をなぐさめよ、その服役の期すでに終り、その咎既に赦されたり」といふ第二イザヤの始めの言葉が私の心にささやかれた」と。彼はひとり外遊生活に行き、留守中の妻の立場を十分理解できなかつたことを神に懺悔した。それは簡単に忘れ去ることのできるものではなかつたのである。

鑑三の『求安録』のこの箇所には、他に「イザヤ書」四十九章十五―十六章、それに「マラキ書」四章二節が同時に示される。いづれも神の大きな恵みの啓示の箇所である。さらに「イザヤ書」五十三章や「使徒行伝」十六章三十一節や「ヨハネ伝」三十六章十六節を引用した後、「然り人は信仰に依てのみ義とせらるゝなり、儀式に依るにあらず、血肉に依るにあらず、位に依るにあらず、学識に依るにあらず、行に依るにあらず、只十字架の辱を受けしナザレの耶穌を信するに依るのみ」という結論が導き出される。鑑三は「之れ迷信の如くに聞へて真理中の真理なり」と言い、「信仰に依らずして

人の救はるべき理由あるなし」と念を押す。

砕けたる心とイエス・キリスト

次の「信仰の解」では、「信仰は実なり」とし、罪とは何かが問われる。そして「イザヤ書」四十九章十三〜十五を引き、神の無限の愛に対し、「我の為すべきことは我を全くその手に托す(Lave)のみ、魚が水中に遊泳する如く我等も神の愛の中に浸さるゝものなり」の勧めがなされる。さらに「逆説の如く見へて真理中の真理たることは人は自ら勉めて善人たる事能はざる事是なり」とか、「罪の重荷に庄せらるゝもの、良心の譴責に困しむもの、唯一の特効薬は基督の十字架なり」との勧めがなされる。

「楽園の回復」では、まず「基督なる実在は此失望世界の必要物なり」と鑑三は言い、「基督に依てのみ人世は堪ゆべきものとなれり」とも断言する。彼はルーテル、ジョン・バンヤン、エリオットなどを引用するほか、自らの洗礼を受けた後の体験をも踏まえ、「詩篇」五十一篇をも示して「砕けたる心」の必要性を説く。『旧約聖書』は彼の愛読するところでもあった。彼は例をさまざまな人物、書物に採って自説を説く。その中核に存在するのは、イエス・キリストと聖書であった。

不敬事件以後とかく鬱屈して、よき職場(第一高等中学校)を解雇され、日常生活にも事欠く中で、よき妻しづを与えられ、文筆生活に活路を見出そうとしていた彼は、次のようなことばをも認める。「憂鬱の中に沈殿せし余の生涯、今は春雷と共に動き、蟄虫と共に萌蘇し、生命は重荷にあらずして快の快たるものとなれり」と。彼は新たな希望をもって本書『求安録』を書いているのである。

先を急ごう。次の「贖罪の哲理」は、本書中最も重視されてよい箇所と言えよう。鑑三は自らの体験をも踏まえて、この重要問題を語る。ここでは福音書が、キリストの存在がクローズアップされる。

「われ我が罪を悔ゆると雖も我を赦すの神なかりせば如何せん、放蕩子悔いて家に帰ると彼を見て憫み趨り往き其頸を抱て接吻する父のなかりせば彼は何の面目と勇氣ありて父の許に来らんや、我は我の罪に耻て神に帰る能はず」と鑑三は書く。その解釈は「罪人なる我が神と平和を結ばん為には神は正義の神としてのみ我に現はれずして、慈悲の神、救の神として現はれざるべからず」というものである。

絶え間なく祈ること

本論は、次にキリストの十字架上の死に及ぶ。彼は「而して基督の生涯並に十字架の死は神が人類の罪を赦し玉ふの証明なり」と言う。さらに論は、キリストの忍耐に至る。彼は「神の忍耐は偉大なるかな」とし、「最終問題」と見出しされた課題に及ぶのである。ここでは「基督信徒は絶え間なく祈るべき」ことが勧められる。「然り彼の生命は祈祷なり」と彼は声を大にして言う。

こうして『求安録』と題された鑑三の『基督信徒の慰』に続く、第二の書き下ろしの単行本は結ばれる。鈴木俊郎は『内村鑑三全集2』の「解題」で、「本書は、聖書のことばを基本に、自伝的体験的に表明された、著者自身の信仰告白であった」と言う。本書は不敬事件に際して、マスコミで喧伝され、全国的に知られた人の著作ということもあって、人々の関心を引いてよく読まれた。

後年のことになるが、鑑三は一九一九(大正八)年一月二十四日

の「日記」の一節に、『求安録』を古本屋で購入した神戸在留の張金棟という中国人の知人が、悔い改めてキリスト教信者となり、一教会を設立するに及んだとの話を記した後、「余は此実験談を聞いて思ふた、為すべきは信仰的著述である」と記している。さらに語を継いで、「噫神よ今より二十六年前熊本市外託摩ヶ原榎樹の下に於て古き支那靴を台にして書きし此書が今日此果を結ぶに至りしは如何なる恩恵ぞ、感謝々々」と書く。熊本の「託摩ヶ原榎樹の下に於て古き支那靴を台にして書きし」というのは、「自序に代ふ」の部分と全体の推敲であり、大部分は大阪時代に書き上がったものである。

『求安録』への書評

なお、本書への書評が当時いくつも出たことは、鈴木範久の『内村鑑三日録 1892～1896 後世へ残すもの』が教えてくれる。それら書評の中から、二つを選び、そのクライマックスの箇所を、鈴木氏に感謝しつつ引用させていただく。いずれも無署名である。まずは『基督教新聞』五二六号、一八九三年八月二十五日付のものから。

本書は「基督信徒のなぐさめ」の続篇とも云ふべきものにて実験に基き内心の戦争を描き出し平和安心に至りし道筋を記したるものなり其の文章の燦爛として光彩ある而も一種の気骨を備へたる引照該博にして縦横無尽なる忽ちに秀麗の山水を見るが如く又閑豁の広野を望むが如く出沒極りなく読者をして巻を措くに暇あらざらしむ然も本書の尤も著しき特質は宛然として著者其の人の氣質風彩を顕はすにあり

次に『六号雑誌』一五三号、一八九三年九月一五日付のものを記す。

此の書は著者内村鑑三氏の自伝なり、(中略)吾人は本書の骨髄を以て贖罪論にありと思惟す、(中略)然りと雖も本書は徹頭徹尾尤も痛切にして尤も奇抜ある文字を以て満つ、其引照の事例中歴史あり、伝記あり、文学あり、生物学あり、ヒブライ語あり、グリーキ語あり、独逸語あり、読者をして氏が材料に富めるに驚かしむ、其説く処の信仰の行路及び其の終結の如き吾人の深く同情を表する処なり、現今深奥なる実験の書に欠乏するの機から本書の如きは其の教会を利益すること甚だ大ならんこと是れ亦吾人が疑はざる処なり

京都時代鑑三は、他に『貞操美談路得記』『伝道之精神』『地理学考』を刊行している。このうち『地理学考』に関しては、すでにふれた。そこで『貞操美談路得記』と『伝道之精神』について、簡単に述べておきたい。

『貞操美談路得記』は、大阪の福音社から一八九三(明治二六)年十二月十五日付で刊行された。福音社は先にも述べたが、今村謙吉が大阪で起こした出版社で、『福音新報』の発行元である。当時はキリスト教関係の出版社はそう多くはなかった。貧窮の極まりにあった鑑三は、印税が多少とも貰える出版社ならどこでもよかったのである。

『貞操美談路得記』について

『貞操美談路得記』は、旧約聖書「ルツ記」の注釈書である。鑑三の生涯における聖書研究、聖書注釈書は数多い。彼の聖書（旧約三九卷、新約二七卷、計六六卷）への言及は、そのすべての巻に及ぶが、本書はその先駆けであった。初版の表紙には「内村鑑三編述」とある。脱稿は「自序」の付記によれば、この年七月下旬とのことである。「自序」の冒頭で、鑑三は「此著は余が家族と共に聖書を講読するの際に談ぜし所のものを蒐集して一書に纏めしものなり」とある。家族とは新婚の妻しづを指すことは言うまでもなからう。

全文の脱稿は、この年（一八九三）七月下旬とのことである。序文は同年十月京都において記されたことも、「自序」に見える。また、「自序」には、この書を成すに当たっては、多くの注釈書に頼らなかつたとある。その理由を「余の浅識と境遇との許さざりし所」と鑑三は書く。

「浅識」は謙辞ながら「境遇」が許さないとは、多忙の日々ゆえ十分な準備ができなかつたことを言うのであろう。が、続いて彼は、そうした理由のみならず、多くの注釈書に頼らなかつたのは、「鸚鵡的直訳様の註釈書を以てせんことを恐れたれば也」と言う。当時は欧米の注釈書が出始めた頃で、それらに頼つた本は鑑三によって「鸚鵡的直訳様の註釈書」と皮肉られているのである。鑑三の聖書注釈書は、その生活が反映している。時に時代が、そして自身を含めた人びとの生活が、そこでは批評されるのである。

こうした聖書研究は、彼の弟子たちにも受け継がれていく。むしろそこには伝統的な注解や注釈もある。が、聖書を語り、そこに自己の境遇と慰めを披瀝するという方法は、他の聖書研究者の聖書研

究とは一線を画す。彼の聖書研究の方法を引き継いだ弟子たちは多い。藤井武・黒崎幸吉・畔上賢造・塚本虎二・矢内原忠雄などがすぐに頭に浮かぶ。彼らは皆、聖書研究を第一とし、そこに自身が行くべき途を探つたのである。

「自序」で鑑三はさらに言う。「聖書は其物自身にて甚だ解し易きもの也、故に註解者の主眼は加成丈け僅少の助言を以て本文を讀者に解せしむるにあり、読者は宜しく簡單明晰なる本文と常に誤認なき神霊の訓辞とに依頼して、注訳者の言は単に参考としてのみ採用すべき也」と。これは現代の読者が聖書注釈書に対する心構えとして採るべき有効な助言でもある。

鑑三の本書への「自序」は、「余は爰に友人大島正健氏の此書に与へられし鄭重なる檢閲を謝す」で結ばれる。大島正健とは、これまで何度も名を出した札幌農学校以来の友人である。大島に「内村鑑三君を憶ふ」の一文がある。そこには『貞操美談路得記』を書いた頃の鑑三のことが回想されている。参考になるので以下に引用する。

明治二十六年、君京都に在り。余も亦同志社教授の職に就き其地に到りて寓居せり。君静子夫人を迎へ、君が奮闘の間物質上の欠乏を補ひ来りしは、内助の力に由れり。君が貧苦の境遇に在りて日夜著書の原稿を作るに忙はしかりしも、宗教の問題は常に、脳裏を往来して倦まず尽きず、一日君と郊外を散歩したるに余を顧みて、君は聖書の字句の inspiration 即ち靈化説は如何に信ずるかとの一問を発せしに對し、余は何気無く、其は字句の靈化の問題に非ずして、靈化せる人の言語の記録なる

べしと答へたり。其日は其儘にして去り、翌日再び面会せし節君は斯く言へり、君が靈化の説甚だ良し、余は一夜思考し、余が多年の疑團多く氷解せりと。以て君が常に信仰の問題を忽がせにせざりしを知るべし。

鑑三が『貞操美談路得記』の検閲(校正)を大島正健に托したのも、このような背景があつてのことであつた。鈴木俊郎は『内村鑑三全集2』の「解題」で、「本書は、当時のわが国のキリスト教界における唯一の旧約聖書註解書としてその学問的水準もまた高く評価されなければならぬ」とし、加えて「本書の特質は、ルツ記の「精神」を説明して、それによつて家庭内の人間関係の正常なあるべきあり方を示すことにあつた。

その叙述に見られる迫真力は、当時著者自身が置かれていた家庭事情と無関係ではなかつたとおもわれる」と言う。的確な指摘である。初期鑑三の書物は、その生活の体験が色濃く反映したものであるのである。

『伝道之精神』ほか

次に『伝道之精神』に入ろう。これは一八九四(明治二七)年二月十日、東京・警醒社書店発行である。前書『貞操美談路得記』刊行後二ヶ月後のことだ。内容は「伝道之精神」「理想的伝道師」「如何にして宗教界今日の乱麻に処せん乎」の三編から成つてゐる。このうち「理想的伝道師」(『基督教新聞』一八九二・三・一八〜四・一五)に関しては、すでに前章で引用、紹介したところだ。本書はタイトル『伝道之精神』が魅力的で、以後、版を重ね、長く読み継がれ、

宣教の手引きとして用いられた。再版(一九〇三・五・一)に際しての「再版に附する序」で、鑑三は「我国有為の青年が続々として此業(筆者注、伝道師)に就くに至るにあらざれば日本国の救済は期して待つべからざるなり、余は謹んで再び此著を我国憂国の青年諸氏に献せんと欲す」と書き付けている。

鑑三は続けて『地理学考』を出す。本書に関しては、部分的にはすでにふれたが、これも警醒社書店からの刊行で、発行年月日は一八九四(明治二七)年五月十日となっている。

京都時代の書き下ろしの単行本であり、のち『地人論』と解題され、版を重ねた。目次に従い、その内容を紹介すると、地理学研究の目的にはじまり、地理学と歴史二、一、地理学と撰理、アジアと西方アジア、ヨーロッパ論、アメリカ論、東洋論、日本の地理とその天職、南三大陸の全十章から成る。「自序」で鑑三は、「此書は十数年間に渉る著者の地理学上の考察より成れり、其創意は勿論先哲の遺訓に出でしと雖も、其全体の結論並に細目に至ては多くは著者自身の思考に就れり、惟り悲む此壯宏幽玄なる問題を考究論述するに当て著者の見聞の狭隘にして彼の筆力の自由ならざること」と書き付けている。

なお、この『地理学考』を読んだであろう人物に、岩手県花巻出身の宮沢賢治がいたとの指摘が、恩田逸夫によつてなされた。半世紀以上も前に書かれた恩田の「テパンタール砂漠の位置―宮沢賢治の地理観と内村鑑三の「地人論」」は、当時としては研究における越境という観点の導入に迫つた画期的労作であつた。

四 日清戦争義戦論

ルツの誕生

一八九四(明治二七)年、日清戦争の年が明けた。内村鑑三は京都で執筆生活に明け暮れていた。彼は日本人の優れた人物の伝記を英文で書き、それをアメリカをはじめとする英語圏の人々に読んでもらおうと考えていた。それはやがて *Japan and Japanese* として刊行される彼の英文での第二の著作である。一方で彼は第三高等中学校の基督教青年会の日曜学校で旧約聖書の「アモス書」の講義をはじめていた。

日曜日は聖書研究に当てるといえるのは、札幌農学校時代からの彼の習性ともなっていた。「アモス書」の講義は、三月十八日の日曜日まで行つた。「アモス書」は、十二小預言者の一人アモスの生涯を描いている。アモスは預言者を職業とする者ではなく、ただ神に「イスラエルに預言せよ」との召命に生きた人物である。鑑三は自身の生き方をアモスに重ねていたかのようだ。

三月十九日、妻しづが女の子を産む。名をルツと名付けた。旧約聖書の「ルツ記」による命名である。鑑三は前年十二月十五日付で『貞操美談路得記』を福音社から刊行しており、ルツの生涯に強く惹かれていた。それ故の命名であった。安産であったようだ。鑑三は後年ルツ誕生の頃を回顧し、「日清戦争開戦の当年、ルツ子が京都の借家に於て生れました時には、私共の此世の境遇が其絶下に達したる時でありまして、彼女の誕生を祝ふて呉れました者は彼女の祖父と祖母との外には誠に少数でありました」と書くことになる。後述するが、ルツは十八年後に天に召される。鑑三が再臨運動にかか

わっていくのは、ルツの死を契機とする。

ルツは戸籍上次女である。第一の妻浅田タケとの間に生まれたノブが長女であった。が、タケとは結婚後すぐ離婚し、長女のノブは浅田家の養女となつたため、鑑三とは縁が切れていた。それゆえルツはじめての赤児として鑑三に見えたことになる。それだけに赤児への愛がわき上がる。彼はこの喜びをアメリカの D・C・ベル宛の便りの一節にも書いている。以下のようなのだ。

興味をもつて読んで頂けるニュースがあります。二日前女兒が生まれ、ルツと命名しました。母子とも元気です。赤児を持つということ、実に奇妙な経験です。私のような「悪しき者」が、自分の子供をこんなに純な愛をもつて愛することを思えば、わが天の父が私を愛したもう愛はそもそもいかにわかりだろ、ということを早くもさとりつつあります。人は、わが子を持たぬうちは、神の愛を解し得ないと信じます。

日清戦争はじまる

さて、内村鑑三が京都で女兒を得、その子のためにもと、ひたすら著述に打ち込んでいた一八九四(明治二七)年七月、日清戦争が勃発した。戦争は当時専制政治を行っていた朝鮮で甲午農民戦争(東学党の乱)が起り、その鎮圧をめぐる日清両国の指導権争いが高じて始まった。戦争は軍部に引きずられた日本政府の朝鮮出兵という閣議決定によって進められ、同年七月二十五日の豊島沖海戦(ほうとうおきかいせん)によって開始された。三十一日、日清国交断絶、八月二日、宣戦布告となる。

内村鑑三は、この戦争にどのような態度をとったのか。彼は主戦論を当然のこととし、当初、義戦論者として振る舞った。十年後の日露戦争に対しては、強硬な反戦論を展開した彼が、日清戦争に対してなぜ主戦論の立場をとったのか。豊島沖海戦がはじまるや、彼は「世界歴史に徴して日支の関係を論ず」という論を、七月二十七日の『国民新聞』に寄稿した。そこでは冒頭、以下のように書いている。

日支兩國の關係は新文明を代表する小国が旧文明を代表する大國に對する關係なり、人類の進歩歴史に於て此關係を有する二國が相對立して終に衝突に至りし實例は一にして足らず、歐洲文明を代表する小希臘ギリシヤが亞細亞文明を代表する大波斯ペルシヤに體せし、共和主義を代表する小羅馬ロマが豪族主義を代表するカルタゴに對せし、新教主義を代表する小英國が旧教主義を代表する大西班牙スペインに對せし、皆此關係なりき、二者併立べいりつして長く平和を保ち得べきにあらず、旧は大なるが故に新を侮り、小は新なるが故に旧を賤しむ、二者の衝突は免かるべからざる所、正流逆流の相接する處、之をして平和に經過せしめんと欲す、是れ大りに反するもの、歴史の趨勢に逆ふもの、平和を愛して進歩を憎むものなり。

これはまさに世界史を援用しての、特異な義戦論というほかなしい。「進歩」には、大小・新旧の対立・衝突があり、「進歩」には致し方のないものが伴うというのである。彼の日清戦争に対する、より具体的考えとも言える肯定論は、当時横浜で発行されていた一

八九四年八月十一日付の THE JAPAN WEEKLY MAIL に寄稿した JUSTIFICATION FOR THE KOREAN WAR に見ることができ。その邦訳は同年九月三日刊行の『国民之友』二三四号の「特別寄稿」欄に、鑑三自身の訳文によって載せられているので、いま、現行『内村鑑三全集3』収録の邦文「日清戦争の義」によって見ていくことにする。

「日清戦争の義」で鑑三は、まず、「此物質的時代の人は、其の戦争の悉く慾の戦争たるを承認すると同時に、戦争の避く可からざるを知るが杖に、終には慾を以て戦争の正当なる唯一理由なりと信じ、慾に依らざる戦争とは全く彼等の思惟に上からざるに至れり」と書く。その上で鑑三は、次のように言う。

然れども歴史上義戦のありし事は何人も疑ふ能はざる所なり、彼のギデオンがミデアン人を迎へ、「神と彼との劍」とを以て敵軍の十有二万人をヨルダン河辺に殺戮せしは義戦なりしなり。彼の希臘人が波斯の大軍を迎へ、之をマラソン、サラミス、プラテア、に擁し、塵滅の敗を以て彼等を破り、垂をして再び欧を蹂躪すること能はざらしめしは義戦なりしなり。彼のグスタヴス、アドルフハスが独逸の中真に進入し、之を天主教徒の圧制より救ひ出せしは義戦なりしなり。若し戦争の多分は慾より来るとするも渾ての戦争は慾の戦争に非らず、利慾を以て戦争唯一の理由と見做し以て神聖なる人類性の価値を下落せしむる勿れ。

義戦は存在しない

このように述べた鑑三は、「吾人は信ず日清戦争は吾人に取りては実に義戦なり」との主張を展開する。彼は「其義たる法律的にのみ義たるに非らず、理論的に亦た然り」とまで言う。

けれども、現実には戦争はむごいものであった。理想なき戦いであった。鑑三が戦中に書いた「日清戦争の目的如何」(「国民之友」一八九四・一〇)では、義戦は何処迄も義戦たらざるべからず」と言い、「利を目的とする君子、権柄を目的とする義戦、余輩は其何物たる乎を解するに甚だ困しむなり」とまで書く。が、戦争が展開するにつれ、鑑三は義戦など存在しないことを嫌と言うほど知らされることになる。戦争は日本と中国(支那)との朝鮮をめぐる争いでもあり、やがて日本は閔妃暗殺事件を起こす。事件は朝鮮李朝二十六代李大王の妃閔妃が日清戦争講和条約締結後、ロシアと結び、日本排斥を企てたことにより一八九五(明治二八)年十月八日、日本公使三浦梧楼の陰謀によつて、閔妃が惨殺されたという事件である。

閔妃は当初の親日的な政策から次第に清に頼る事大主義に路線変更して行つたが、そのような状況を見た親日開化派の金玉均らは、閔妃を追放しない限り朝鮮の近代化は実現しないととして、一八八四(光緒一〇)十二月に甲申政変を起こした。それにより閔妃は一時期政権を奪われる。が、袁世凱率いる清軍の力によつて政権を取り戻す。その後、閔妃は親露政策をとりはじめる。一八九四(光緒二〇)年二月、甲午農民戦争(東学党の乱)が起きると、閔妃の朝鮮は清軍と日本軍の介入を招き、それが日清戦争の原因となつたとされる。閔妃の暗殺は、そのような背景の延長線上にあり、日本政府の暗黙の了解のもとに行われたものであった。

京都にいて、この事件のことを知つた内村鑑三は、やり切れない思いを懐いた。彼はすぐ「時勢の觀察」(「国民之友」一八九六・八・一五)というタイトルの文章を一気に書き、その気持を託した。この文章は、「其一、公德と私徳の分離」、「其二、実益主義の国民」、「其三、自賛的国民」、「其四、国民の罪惡と其建築物」、「其五、方針の定らざる理由」、「其六、東洋の青年団」、「其七、俗吏論」、「其八、小なる日本」の八つのセクションから成る。「其二、実益主義の国民」には、当時のマスコミ批判も見られ、以下のような反省のことが記される。

余輩の如き馬鹿者ありて彼等の宣言を真面目に受け、余輩の廻らぬ欧文を綴り「日清戦争の義」を世界に訴ふるあれば、日本の政治家と新聞記者とは心密かに笑て曰ふ「善哉彼正直者よ」と、義戦とは名義なりとは彼等の智者が公言するを懼らざる所なり、故に戦勝て支那に屈辱を加ふるや、東洋の危殆如何程にまで迫るやを省みる事なく、全国民挙て戦勝会に忙はしく、ビールを傾くる何万本、牛を屠る何百頭、支那兵を倒すに野猪狩を為すが如きの念を以てせり、而して戦局を結んで戦捷国の位置に立つや、其主眼とせし隣邦の独立は措て問はざるが如く、新領土の開墾、新市場の拡張は全国民の注意を奪ひ、偏に戦捷の利益を十二分に収めんとして汲々たり、義戦若し誠に実・に・義・戦・た・ら・ば・何・故・に・国・家・の・存・在・を・犠・牲・に・供・して・戦・は・さ・る、日本国民若し仁義の民ならば何故に同胞支那人の名譽を重んぜざる、何故に隣邦朝鮮国の誘導に勉めざる、余輩の愁歎は我が国民の真面目ならざるにあり、

苦い体験の反省

内村鑑三が十年後の日露戦争に際して、強硬に反戦論を唱えたのは、この苦い体験あつてのことなのである。彼は反省を込めて、アメリカのベル宛ての手紙に、「義戦は略奪戦に近きものと化し、その「正義」を唱えた預言者は今や恥辱の中にあります」と書くほかなかったのである。

こうした中で、鑑三はこの年（一八九六）十二月四日月曜日から京都で、「キリスト教教義月曜学校」を始めていた。対象は第三高等中学校（のちの第三高等学校）の学生であつた。月曜学校は毎週月曜日の夜に開かれ、聴講料五十銭であつたという。京都の長老派の教会が会場を提供してくれたという。月曜学校は、約三ヶ月ほど続いた。五十銭の聴講料は、内村家の家計を多少とも支えたようである。

この年十二月十四日付ベル宛便りには、「ごく最近「キリスト教教義月曜学校」と私が名づけた学校を開いたことを御聞きになれば、定めし興味を抱かれることと思います。生徒としてえり抜きの者だけを少数得たいので、特に週間中一番忙しいこの日を選び、三ヶ月を一期として、一人五十銭の聴講料をとることにしました！こんな風にキリスト教を説くことは、わが国始まって以来のことです！」とある。この方法は、彼の弟子矢内原忠雄が十五年戦争の中で東大を追われ、選り抜いた信仰の精鋭を対象に開かれた、土曜学校に引き継がれる²³。

注 (1) 関根正雄編著『内村鑑三』清水書院、一九六七年二月五日。七三ページ

(2) 内村鑑三『後世への最大遺物』便利堂、一八九七年七月一日

(3) D・Cベル宛、一八九三年一月一日付、山本泰次郎訳『内村鑑三日記書簡全集5 書簡I』一九六四年七月三〇日。二四六ページ

(4) 西阪保治・河本哲夫・秋山憲兄著『日本キリスト教出版史夜話』新教出版社、一九八四年一〇月四日。なお、その後秋山憲兄による『キリスト教出版70年の歩み』新教出版社、二〇一〇年三月二〇日が刊

行されているが、これまたキリスト教出版に関わる貴重な証言となつている。

(5) 注4に同じ。一九二〇ページ

(6) 内村鑑三『故横井時雄君の為に弁ず』『内村鑑三全集 31』収録。一五五〜一五六ページ

(7) 海老名弾正「内村君と私との精神的関係」岩波版一九三三年三月全集『月報』のち、鈴木範久編『内村鑑三を語る』岩波書店、一九〇年一月二二日収録。一七二〜一八一ページ

(8) 政池仁「内村鑑三伝 再増補改訂新版」教文館、一九七七年一〇月三〇日。一三一〜一三二ページ

(9) 新保祐司「内村鑑三」構想社、一九九〇年五月一〇日。二六八ページ。のち、文春学藝ライブラリー収録、文藝春秋、二〇一七年一〇月一日収録

(10) 森本 穂「阿部知二原郷への旅」林道舎、一九九九年二月二五日。一三八〜一五八ページ

(11) 注4に同じ。二二八ページ

(12) 河内重雄『日本近・現代文学における知的障害者表象』九州大学出

- 版会、二〇二二年三月二〇日、二二一ページ
- (13) 小原信『内村鑑三の生涯 日本的キリスト教の創造』PHP文庫、PH
P研究所、一九九七年六月一六日。一九二ページ
- (14) 矢内原忠雄「第二イザヤ書講義」『嘉信』第二卷第一〇号(一九三九・
一〇) 第三卷第二号(一九四〇・二)、のち『矢内原忠雄全集』
第二巻収録、五一八ページ
- (15) 関口安義『評伝矢内原忠雄』新教出版社、二〇一九年四月二五日。
三〇九〜三二〇ページ
- (16) 鈴木俊郎「解題」『内村鑑三全集2』四九二ページ
- (17) 鈴木範久『内村鑑三日録 1893〜1896 後世へ残すもの』教文館、一
九九三年九月二五日。二一九〜二三四ページ
- (18) 大島正健「内村鑑三君を憶ふ」『内村鑑三追憶文集』聖書研究社、
一九三一年三月二八日
- (19) 恩田逸夫「テパントール砂漠の位置―宮沢賢治の地理観と内村鑑三の『地
人論』―」『四次元』一九六一年九月一日
- (20) 内村鑑三「謝辞」『聖書之研究』一三九号、一九二二年二月一〇日。『内
村鑑三全集19』三三三ページ
- (21) D・Cベル宛、一八九四年三月二日付、山本泰次郎訳『内村鑑三
日記書簡全集5 書簡I』教文館、一九六四年七月三〇日。二七六
ページ
- (22) D・Cベル宛、一八九五年五月二日付、山本泰次郎訳『内村鑑三
日記書簡全集5 書簡I』教文館、一九六四年七月三〇日。二八六
ページ
- (23) 注15に同じ。四六八〜四七二ページ
- 受領日 二〇二〇年八月一九日
受理日 二〇二〇年十一月四日